

第1学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「はをつかおう」 教材名「はをつかおう」

2 単元の目標

次の学びを目指す。知識・技能では、本時に扱う仮名や助詞の表記を確かめ、語や文の中で使う。思考・判断・表現では、誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直す。交流や試行の前後を比べ、はを使った文を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①本時に扱う仮名や助詞の表記を確かめ、語や文の中で使っている。 (〔知識及び技能〕(1)ウ)	①「書くこと」において、誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直している。(B(1)ウ)	①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

この単元では、助詞のはの表記を中心に学ぶ。誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直す活動を組むことで、言葉について知ることと、目的に合わせて使うことを結び付ける。指導要領の〔知識及び技能〕(1)ウとB(1)ウに関係する学習である。成果は、はを使った文に示した判断と理由から捉える。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

予想される難しさは、聞こえた音のままを書き写すことである。物の名前のわと文をつなぐはを、教師作成の短文で比べる。初めの答えを消さずに残し、学習後に何を変えたか、なぜ残したかを比較できるようにする。児童の反応は予想である。実在の学級の姿を示すものではない。読む速さや記述量の差を、そのまま国語の力の差として扱わない。

5 指導と評価の計画（全1時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （本 時）	○誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直す。 ○考えた理由を交流し、はを使った文を仕上げる。	知①・思①（学習記録）／態① は関連する学習の記録も合わせて見る。



6 本時の指導 (1/1)

(1) 本時の目標

誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直すことができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	1 身近な経験と既習の言葉を確認め、今日使う教材や資料を準備する。 ○「声ではわと聞こえるのにどの字を書くか」 【めあて】助詞のはの表記について、自分の考えと理由を表そう。 〈予想される児童の反応〉 ・「わたし」の中は「わ」だけれど、その後は「は」と書く。 ・どこを確かめれば答えられるか、使う教材や資料を見ている。	本時に使う具体例を見える所へ置く。聞こえた音のままわを書く姿が見られても、すぐに訂正せず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。
展開 (分)	2 誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直す。 3 書いたものを読み返し、「声ではわと聞こえるのにどの字を書くか」を観点に、友達へ伝わりにくい箇所を確かめる。 4 必要な語句や構成を直し、直す前後と理由を残す。 ○教師作成の「わたしは えを かく。」を読み、「わたし」の中の「わ」と、後の「は」を区別する。自分がすることを同じように文に書く。 〈予想される児童の反応〉 ・「わたし」の中は「わ」だけれど、その後は「は」と書く。 ・友達の説明や試した結果と比べ、最初の答えを直すか検討している。	物の名前のわと文をつなぐはを、教師作成の短文で比べる。知識・技能では、本時に扱う仮名や助詞の表記を確認め、語や文の中で使っている。この姿を、使った言葉や読み書きの様子で確かめる。口頭で説明する、対象を指す、教師に記録してもらうなど表し方を選べるようにする。 ◎①誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直している。(B(1)ウ) (初稿・見直した稿・修正理由)
まとめ (分)	5 はを使った文を確認め、本時に選んだ言葉や方法と、その理由を伝える。 【まとめ】だれが何をするかを書く文では、「わたしは」のように、つなぐところの「は」を確かめて書く。 6 最初から変えた点、理由を確かめて残した点を振り返る。 〈予想される児童の反応〉 ・自分が選んだ言葉や方法について、確かめたことを理由として説明している。	結論が教師の例と同じかだけで判定しない。声ではわと聞こえるのにどの字を書くかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。 ◎知① (はを使った文と実際の言葉の使用) ・態① (単元を通した試行や見直し)

(3) 本時の評価

おおむね満足できる状況は、誰が何をするかを表す文を読み、助詞のはを使って書き直している姿である。初稿・見直した稿・修正理由を基に判断する。聞こえた音のままわを書く場合は、物の名前のわと文をつなぐはを、教師作成の短文で比べる。読み書きの速さや発表の回数ではなく、本時の目標に関わる言葉の使い方と判断を捉える。

(4) 板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には助詞のはの表記を確かめる語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側にははを使った文で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に理解できたこととその後を使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

